



理想の美人

品小

永代美千代

上

「ちよいと御覧なさい、美顔士」
 「そ、くさ斯う云つて、角野さん
 が突然に登代子の袂を引きました
 「え何？」
 登代子を初め、並んで歩いてゐ
 た一同は立止つて、お徳舌をやめ
 ました。

「れ、一寸」
 「額の處を、いやくつて見せたり
 角野さんは、矢張り彼方を見詰
 て立ちました。

「美顔士」
 「美顔士」
 河本さんも、小森さんも一齊に
 叫びました。

眼鼻立ちの立派な上に、抜ける
 程の白い、おまげに又上から下ま
 で、食べたい程華かな、そして優
 美な友禪模様の、結構な縮緬揃ひ
 の着物を着た十四五とも見える令
 嬢が、おつきの人らしい、これも
 上品な年増と一緒に、本屋の前
 に立つて、頻りに飾窓をのぞいて
 ゐるのです。

「れ、美人でせう」
 「角野さんは今一度繰返しました
 「全くあんな綺麗な方って、めつたに無いわ
 御覧なさい、あの髪は立派なこし
 色澤の好い、癖一つない澤山の
 毛髪を、ふんわりと突き出した眉
 に結つて、六尺のたねな残りの毛

先きを、ふさぐと後に垂れた河
 本さんは、先づ真先に、美しい
 人の髪を讃めました。
 「うう、うう、髪二層とも云ひますから、河
 本さんが一番に髪を仰つたも無理ないわ、
 だけれども私、あの方の鼻つきが氣に入つて
 よ」
 面長の中高顔と云つた風な小森
 さんは、不躰から御自慢のお鼻の
 あたりをハンケチで拭きました。
 「本當に美人型のお鼻、だけれどもあの
 色の白い事」
 色の白いは七難隠すとか、角野
 さんは色白の、愛くるしい九ばかり



道の萩しけ露も晝の園公

「一體登代子さんの理想の美人は、
 の、あなたは何時でも美人を御覽なすつて
 お眼めになつた事はないわねえ」
 角野さんは不満さうに突込みま
 した。
 「誰だ、私だつて美人を見れば驚かすや、
 だけれども、そんなに美人で、滅多にありや
 しくなくてよ」
 「だつてあれ位ならねえ」
 三人は又眼と眼を見合つて首肯
 き合ひました。
 「登代子さんのほつたり理想が高すぎるんだ
 わ」
 「さうぢやないわ、でも、一寸と外形が美し
 かつたつて、どんな心の人だか解りもしない

やでした。

河本さんも、小森さんも、角野
 さんも、三人を、美しに、美しに、
 見立て、盛んに讃め稱へる中
 に、登代子はひとりで口をつぐ
 んで、最初から一言も云ひません。

「登代子さんは如何、あの方の何處が一番
 好いと思召して？」
 「それ、私、何だか思ひませんわ」
 「ア、だつて美人だと思はなくて？」
 「それア、幾らか」
 「登代子は不承不承に答へました。
 「まあ、三人は呆れて眼と眼を見合せま
 した。

の、直ぐ美人にしてしまふのは、
 登代子はむきになつて辯解しま
 した。
 「まあ、誰だ、私だつて美人を見れば驚かすや、
 だけれども、そんなに美人で、滅多にありや
 しくなくてよ」
 「だつてあれ位ならねえ」
 三人は又眼と眼を見合つて首肯
 き合ひました。
 「登代子さんのほつたり理想が高すぎるんだ
 わ」
 「さうぢやないわ、でも、一寸と外形が美し
 かつたつて、どんな心の人だか解りもしない

「登代子さんは如何、あの方の何處が一番
 好いと思召して？」
 「それ、私、何だか思ひませんわ」
 「ア、だつて美人だと思はなくて？」
 「それア、幾らか」
 「登代子は不承不承に答へました。
 「まあ、三人は呆れて眼と眼を見合せま
 した。